

# 中学校説明的文章教材に学ぶ「問いの立て方」

## : McTigheとWigginsによる七つの「本質的な問い」を手がかりに

学籍番号 229301

氏名 池端向日葵

主指導教員 土山和久

副指導教員 畠山久子

### 1. 問題設定

私がこのテーマで研究したいと思った理由は、昨年度行った基本学校実習Ⅱでの授業実践にあった。実際に基本学校実習Ⅱで授業を行うと、「主体的・対話的な学び」の量に対して、「深い学び」にまで到達できていなかったことや、発問の不明瞭さで生徒に十分な学びを提供できなかったことが大きな反省点としてあげられた。特に読解をメインにした授業では、教師の読み取った内容を伝えていく「講義型」の授業になりがちであったため、生徒たちは、内容は理解することはできても、「なぜそのように読み取れるのか」が分からずにいたと思われる。そのことが基本学校実習Ⅱの授業での反省点としてあがった「深い学び」に結びつかなかった原因の一つではないかと考えた。そして、自身の発問の仕方の甘さ、各グループから全体への共有不足、読解の授業での一方通行の指導が生徒たちの「考える力」を阻害してしまい、「深い学び」の開発ができなかったと考えた。そこで、本研究では、国語科の中でも最も授業時間数が多い「読むこと」の学習指導において、生徒自身の「探究心」を養うための指導に着目した学習課題を開発することを通じて、後述する「問いを立てる力」の育成を図り、生徒の興味関心を引かせる授業とは何かについて考察することを目的としている。

そこで本研究では、「問いを立てる力」に必要な「資質・能力」の育成の可能性について公立中学校において実践的に考究するものである。

### 2. 「本質的な問い」とは

ここでは、「本質的」という言葉の定義や「本質的な問い」について解説している。

ウィギンズらが提起した「本質的な問い」とは具体的にどのようなものがあるのか。その問いの定義を明らかにしたうえでどのように授業に生かしうことができるのかについて中学国語科において、この「本質的な問い」を扱うことができる教材などはあるのかについて考察した。

また、この「本質的な問い」を学習者たちが自ら考えていくことができるように促すためにはどのように授業していくことが大切なのかについて考察した。

### 3. 中学校説明的文章教材における「本質的な問い」の抽出

ここでは、この「本質的な問い」を基に、中学校で実際に使用されている教科書を使い、それぞれの説明的文章に内包されている「問い」を「本質的な問い」で示されている7項目で分類した。

使用教材は光村図書『国語1・2・3』（中学校）とする。この教材を基に抽出した「本質的な

問い」から、それぞれの文章が持つ役割等について分析及び考察した。

#### 4. 「問いの立て方」を意識した授業構想

本章では、先述した「本質的な問い」の抽出を基に、実際に授業していく中でどのような点に着目して授業を進めていくべきなのだろうかということについて考察した。今回は先程テキスト分析をした教材のうち、発展課題実習Ⅱで実践した教材『「不便」の価値を見つめなおす』で授業モデルを構想した。

#### 5. 結論

今回の研究を通して、「本質的な問い」というものは教材の内容と直接かかわるものが多いことが分かった。また、今回実際に「本質的な問い」を基に説明的文章で分類及び抽出した結果、①の「オープンエンドな問い」は圧倒的に少なく、抽出も難しい問いであった。また、⑦の「生涯にわたってなんども問い直しをされるもの」も論理的説明文以外の教材ではあまり内包されていないと考えられる。一方で、③の「より高次の思考を誘発するもの」や④「重要で転移可能な概念を指し示すもの」のような連動性があるものは、中学校の説明的文章教材にも多めに内包されていると考えることができる。この結果から、一年生ではまだ探究的な学びではなく、あくまで説明的文章になれるためにより分かりやすい問いや内容が多いのではないかと考えられる。先述した通り二年生では、一年生と比べると、全体的に「本質的な問い」がバランス良く内包されている。しかしながら、文学的文章教材ではなかなか難しい③「より高次の思考を誘発するもの」の問いに圧倒的にそのバランスの中でも重点を置いており、そこから一年生で学習したことを基により思考のレベルが上がる問いを立てられるようにすることをこの学年では促していると考えることができる。そして、三年生では、読み比べ教材が収録されており、一年生や二年生にはなかったより論理的に物事を捉えさせる傾向があると考えられる。また、三年生では義務教育の集大成として最後の説明的文章教材である「誰かの代わりに」では、自らのことを考えて問いを立てる力をつけるような記述が見られる。このような教材を最後に行っているのも、高等学校から授業が始まる「探究的な学習」につなげていくためのものであると考えられる。

つまり、中学校の説明的文章教材は、直接的な記載がないだけで、生徒たちの今後につながるような「本質的な問い」の宝庫であると考えることができる。